

令和元年7月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館(青梅市駒木町1-684 TEL0428-23-6859)

## 青梅市で再発見されたヒメザゼンソウ

青梅市では種子植物とシダ植物を合わせて1,705種類もの植物が記録されています(飯泉・曾根, 1982)。その中には近年見られなくなってしまった植物が数多くありますが、そういった植物のうちの一つであるヒメザゼンソウ *Symplocarpus nipponicus* Makino を2019年春に再発見しました。

ヒメザゼンソウはサトイモ科の1種で、高原の湿地に咲くミズバショウに近い仲間です。ギシギシに似た大きな葉をつけますが、花序(小さい花が集まったもの)は小さくて、4~7cm くらいの“仏炎苞”<sup>ぶつえんほう</sup>に包まれています。仏炎苞は、ミズバショウでは真っ白の大きな花のように見える部位で、実は葉が変化したものです。ちなみに、仏炎苞とは仏像の背後を飾る光背<sup>こうはい</sup>や火焰光<sup>かえんこう</sup>の形に似ているため、その名称がついたとされています。ミズバショウの白い大きな仏炎苞と違って、ヒメザゼンソウのそれは紫色を帯びた暗い茶色で、小さくて目立ちません。また、ミズバショウは花が咲いた後に葉が展開しますが、ヒメザゼンソウは葉が先に開いて、6月に花が咲くころには枯れてしまいます。

今回発見したのは青梅市北東の加治丘陵で、本年4月8日に発見した時にはヒメザゼンソウは見る限り7株だけでした。また、開花時期とされる5月下旬から6月上旬に何回か再訪しましたが、残念ながら開花個体はありませんでした。

ヒメザゼンソウは「青梅市産高等植物目録」(飯泉・曾根, 1982)にも掲載されていますが、青梅市内では「貴重種」とされています。また、東京都内の絶滅のおそれのある生物を掲載した「東京都レッドデータブック」(<http://tokyo-rdb.jp/index.php>)でも、都内では極めて稀なために西多摩地域で絶滅危惧II類に指定されています。そのため、今回の記録は非常に貴重な記録といえるでしょう。多摩地域ではヒメザゼンソウの生育地は数か所しか知られていませんが、日の出町大久野にあるヒメザゼンソウ群生地は有名で、町の天然記念物に指定されています。

加治丘陵のヒメザゼンソウ生育地は丘陵地の北斜面側の裾にあって、雑木林の林縁<sup>りんえん</sup>の刈り取られて明るくなった環境にありました。ヒメザゼンソウの周りにはカタクリやイチリンソウなども見られたことから、かつては明るい雑木林として維持管理されていたものと考えられます。また、近くには水たまりもあったことから加治丘陵の山裾からしみ出した水で湿潤<sup>しつじゆん</sup>な環境が維持されている場所でした。日の出町大久野の群生地も丘陵地の北斜面に面した水田の土手にあるため、同じように湿潤な環境になっていました。

ヒメザゼンソウは北海道から本州に広く分布していますが、分布の中心は日本海側で太平洋側には少なく、関東地方南部ではごく少数の生息地が知られているのみです(大塚, 2002)。本来、冷涼な地

域に多いヒメザゼンソウが温暖な多摩地域の低標高地に生育するのはとても不思議なことです。同じく冷涼な地域に多いカタクリも多摩地域の丘陵に生育していますが、その生育地は高温や乾燥を避けることができる北向き斜面の湧水や<sup>しみしゅつすい</sup>滲出水のある湿潤な環境に限定されると考えられています(鈴木, 1986)。多摩地域のヒメザゼンソウはカタクリよりもさらに稀なため生育地の条件を明らかにするのは難しいですが、限られた気候条件や地形条件の中で生き延びてきた植物であることには間違いありません。

現在確認されているヒメザゼンソウの個体数は少ないですが、青梅市内のみならず東京都でも非常に貴重な植物なので今後も生育し続けて欲しいと思います。

(文責 御手洗 望)



ヒメザゼンソウの葉



ヒメザゼンソウの花序<sup>かじよ</sup>

#### <引用文献>

飯泉優・曾根伸典. 1982. 青梅市産高等植物目録. 青梅市の自然 II. p 5-67. 青梅市教育委員会. 東京.

大塚孝一. 2002. 日本産ザゼンソウ属の分布. 長野県自然保護研究所紀要(5):1-8. 長野県自然保護研究所.

鈴木由告. 1986. 多摩川中流域におけるカタクリ群落の分布と生態および保護育成に関する研究. 公益財団法人とうきゅう環境財団 学術研究 No. 087. 公益財団法人とうきゅう環境財団.